

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

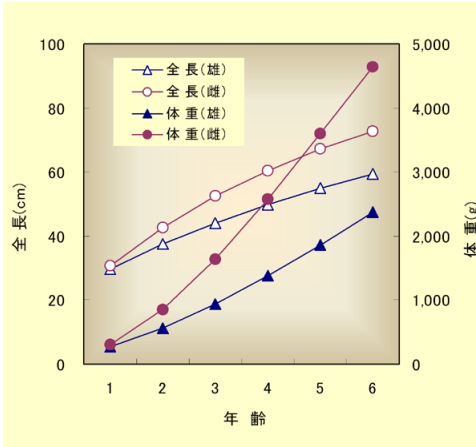
系群名 太平洋北部系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄10歳以上、雌20歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳以上、雌3歳以上
産卵期・産卵場: 5～9月(盛期6～8月)、沿岸各地の粗砂および砂礫(水深20～50m)
索餌期・索餌場: 沿岸各地の水深30m以深の陸棚
食性: 着底稚魚はアミ類、全長10cm以上は魚類やイカ類
捕食者: 着底直後の稚魚は大型魚や甲殻類

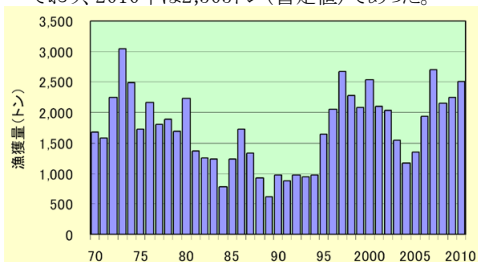


漁業の特徴

小型びき網、刺網、定置網、沖合底びき網等により周年漁獲されている。漁法により漁獲物の体長組成は異なるが、全般的に全長50cm以下(1+、2+歳)が漁獲物の大半を占める。資源保護と管理を目的とした水揚げ物の全長制限(30または35cm以上)が、各県で実施されている。また、ヒラメは高級魚であり、各県において種苗放流が盛んに行われている(2009年の放流数は約492万尾)。

漁獲の動向

青森県太平洋側～茨城県における1988～1994年のヒラメの漁獲量は、1,000トン弱程度で推移していたが、1995年以降は増加傾向を示し、1997年には2,674トンに達した。その後、2000年の2,542トンピークに減少し、2004年は1,170トンに落ち込んだ。2005年から再び増加し、2007年は2,699トンであった。その後の漁獲量は高い水準を維持しており、2010年は2,505トン(暫定値)であった。

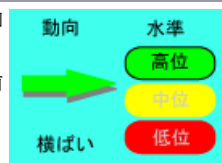


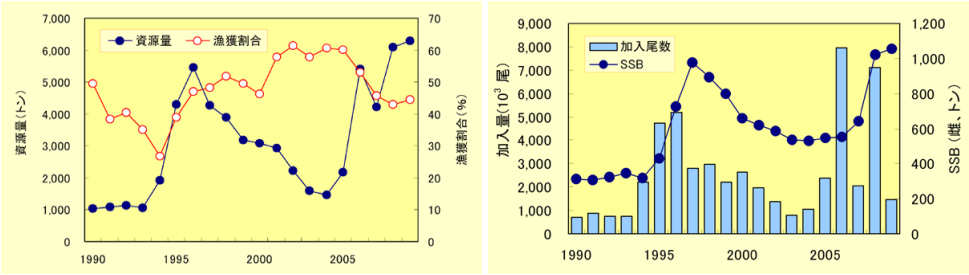
資源評価法

1990～2002漁期年(7月～翌年6月)は、複数年にわたり採集した標本を用いて作成したage-length keyを用い、また、2003～2009漁期年は半年ごとに作成したage-length keyを用いて、福島県(1990～2009漁期年)の水揚げデータより雌雄別年齢別漁獲尾数を算定した。この値を系群全体に引き延ばし、雌雄別にコホート解析を行い、雌雄別年齢別の資源尾数を推定した。

資源状態

本系群の資源量は1歳時の漁獲加入量の影響を強く受けて変動する。1990年代前半の加入量は非常に低い水準であったが、1994、1995年に卓越年級が発生した。その後、加入量水準は漸減し、2003年(2002年級)に最低となった。2004年以降加入量水準が増加し、2005、2007年に再度卓越年級が発生した。加入量水準の変化に応じて、1990年代前半に低水準であった資源量は、1995年以降高水準となり、1996年にピークとなった。その後、漸減し、2004年に近年の最低水準となった。2006年に資源量は急増し、2009年まで高位水準を維持している。





管理方策

卓越年級であった2005、2007年級の高い豊度に依存して、現在(2009漁期年)の資源量は高位水準である。また、産卵親魚量も1990年度以降最高水準にある。このことより、現在の漁獲圧を維持しても、当面は1990年以降の中間水準の資源量を維持できると考えられる。したがって、 F_{limit} として $F_{current}$ を、 F_{target} として $0.8 \times F_{current}$ を用いてABCを算出した。また漁獲物の全長制限は、親魚量の維持と資源の有効利用の観点から重要であると考えられるが、再放流後の生残率を評価する必要がある。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	1,580トン	$F_{current}$	0.81	48%
ABCTarget	1,360トン	$0.8F_{current}$	0.66	42%

- ABCは10トン未満を四捨五入した値
- ABC、F、漁獲割合は漁期年(7月～翌年6月)の値
- $F_{current}$ は2009漁期年の漁獲係数

資源評価のまとめ

- 近年の資源水準は高位、動向は横ばい
- 最近5年間(2005～2009年度)では、2005年級および2007年級の豊度が非常に高い
- 2009年度の親魚量は高い水準であった

管理方策のまとめ

- 資源量を1990年度以降の平均的なレベルに維持するために、漁獲圧を現状程度にする
- 水揚げ物の全長制限を今後も維持する

執筆者: 栗田 豊・玉手 剛・伊藤正木

資源評価は毎年更新されます。